

【カッパドキア】というヘンテコリンな名前が付いている場所がトルコ中部にある。ヘンテコリンな名前が付いているだけじゃなく、実にヘンテコリンな奇岩があることで有名、という事をごく最近知った。



トルコの街といえばイスタンブールだが、観光地としては、このカッパドキアは外せないらしい。日本に来て京都へ行かない様なものと言われた。

そしてこの場所には、奇岩だけでなく、【地下都市】なる名所もあるそうだ。何だか良く分からないが、京都の他に富士山まで付いているらしい。

加えてこのカッパドキア、ワインの名産地という。

さらに駄目押しで、温泉も出ているそうである。京都、富士山、勝沼ワインに道後温泉まであるとなると、行かずにはいられない。

ギョレメへ

そんな訳で、魚のいる温泉地から無理矢理に進路を変えて、カッパドキアへ行く事に。

カッパドキアというのはかなり広いエリアを指すらしいので、まずはその中心地を目指す。

ギョレメというバスターミナルに着いたのは夜の 9 時過ぎ。目の前にネットカフェがあったので、安宿を検索すると SOS という名のペンションが良いらしい。

場所を聞くと近くだと言う。『この方向』と指をさされた方角に行ってみると宿は簡単に見つかった。部屋も空いている。こんな事って珍しい。

こう調子が良いと、大抵はしっぺ返しを食らうものである。でもこの時は、『俺って日ごろの行いがいいもん』などと思っているのである。

カッパドキアの宿

観光地だから、そして最近のトルコの物価高騰を反映してすごく高いと思っていたが、シャワートイレ共同のシングルルームが 10 M リラ (750 円) という。

そして、この部屋は【洞窟】で出来ているのであった。火山岩と火山灰で出来たこの地方の岩は、実に簡単に洞窟が掘ることが出来るらしく、ほとんどの宿が洞窟の部屋を持っているそうだ。私の部屋は 8 畳ほどの広さで、壁はきれいに白く塗られている。洞窟で寝るなんて体験は今後の人生でもあまりないに違いない。



洞窟で出来た部屋。白い壁には、トルコらしく絨毯？が貼られている。

ここもきっと何百年前から人が寝起きしていたところなのだろう。

ただ、洞窟の部屋だけに、トイレは外にあるのだった。この日はバスの移動が長かっただけに、ヘトヘトに疲れていて直ぐに寝てしまったが、明け方トイレに行きたくなり、寒い中、半袖短パンサンダルという、いつもの格好で部屋の外へ出る。

ハッとした。

目の前に奇岩の数々。この宿は少し高台にあるのだが、昨日の夜は全く見えなかった。

これがカッパドキアかぁ、などと鳥肌を立てながら見入ってしまう。実にヘンテコリン。

何でも直ぐ近くの高級ホテルは1泊125ドルだそう。やはり日本人のツアー客が多いらしい。でも見る景色は一緒。こんな瞬間、貧乏旅行者はほくそ笑むのである。



宿から見る奇岩。どの岩にも、高いところに窓が掘ってある。どうやら内部には何層ものフロアがあるみたいだった。

宿の情報ノートを見る。書き込みは、<韓国語>対<日本語>は20対1ぐらい。珍しい。

以前は日本人宿だったようだが、最近は韓国宿になっているようだ。そう言えば昨夜も日本人は私だけだったが、韓国人は4人も泊まっていたと聞いた。韓国の人も情報ノートを熱心に書いている。韓国人、なかなかやるね。

地球の歩き方が、そのまま訳されて中国語バージョンや韓国語バージョンになっているので、日本人が多い宿には、韓国人もやってくるという背景もあるらしい。

最近は本当に韓国人に会う機会が多くなった。15年前に旅したときには、一人も会わなかったが、今はどこへ行っても韓国人らしき人がいる。

韓国人にたずねてみたら、

- ・毎日毎日残業ばかりで働くのに疲れたから旅することにした。
- ・1週間の夏休みじゃどこも行けないから、旅をする為に会社を辞めた。
- ・自分の人生を如何に生きるかを、旅を通して考えたい。

という様なコメントをする人が結構いる。もちろん男子学生の旅行者が多いのだが、社会人や女性も意外と多いのが驚く。

世界を旅しているアジア人は、95%が日本人、4%が韓国人、1%がその他、と、ある日本人が言っていた。韓国は今、世界旅行ブームだそう。あと10年で韓国人の比率はぐっと高まる気がする。

この日、この宿に来た一人旅の女性も韓国人。午前中に着いて、テラスでまったり過ごしている。到着次第、足早に観光スポットを回る訳ではないところが、かなり長期の旅に慣れている感じがする(彼女が単にそういう性格という話もある)。

曰く、『会社なんてやってらんないわよ、安月給で、休みは取れないし。明日は明日の風が吹くわ』だそう。因みに韓国でも、いったん会社を辞めると再就職するのが非常に難しいそうである。この辺の事情は日本と同じみたい。

カッパドキアの奇岩

【ギョレメ屋外ミュージアム】という、トルコには12Mリラ(900円)と高い博物館には、たくさんの奇岩が林立していて、そして多くは洞穴が彫ってある。

これらはあるものは住居、あるものは教会だ。このミュージアムの中だけでもたくさんの教会があって、赤い染料を使って岩肌に絵が描かれている。

あまりに教会が多いのと、洞窟はどれも同じようなものなので途中で飽きてきた。1時間もいれば十分だ。

ミュージアムからの帰る道から、左の方に見事な景色が。

写真の様な岩が勃起、いや乱立しているのである。人間が作った教会より何だか、こっちの方が面白い。

自然ってのはすごいなあ、似たようなものを作り出すんだなあ、何百倍あるかなあ、などと思う今日このごろである。

男根(あっ、書いちゃった)の写真は、実に露骨すぎるからか、ガイドブックにも絵葉書にもあまり登場しないみたいだ。

一方、【きのこの山】そっくりの岩は、これぞカッパドキアという風によく登場する。

カッパドキアは広いので、徒歩で全部を見ようとするとうまいへん。だからレンタバイクや自転車他に1日のツアーがある。このキノコ岩は、ツアーの最後にメインイベントとして登場することが多いみたいだ。

ツアーと言えば、気球に乗ってカッパドキアを上空から観光するというものがあるらしい。

風の影響を避ける為、集合は5時半。その時間には朝日も拝めたりするらしい。

上空の滞在時間は約1時間。ツアー代には、上空でのシャパン代と朝食代、宿への送迎、“気球に乗りました”という証明書(こんなのいらんぞ!)が付いていて、100ドルから130ドルらしい。4社の気球会社がこのカッパドキアにあるという話だ。

アテネ五輪の陸上競技(90ユーロ)と同じくらいの値段である。

『如何に日本人でも、気球に乗るのは一生に一度よ』などと、ツアー会社が巧みに誘う。実際に気球に乗るのは日本人が多いそうだ。実に悩んだが、懐事情を考えて諦めた。ちょっと後悔しそ



この形の奇岩が集中している谷は、通称『ラブ・バレー』と呼ばれるそうだ。



これぞカッパドキアのメイン、きのこ岩。本当に自然ってすごい。

う。

きのこの山があると思えば、とんがりコーンもある。

高い場所から見ると、とんがりコーンと人間が建てた家々がマッチしてとても幻想的。

どの岩にも、人間が掘ったと思われる窓やドアがある。とんがりコーンの土台部分を完全に自分の家に行っているお宅もある。

この奇岩たち、確かに掘りやすい。素手で力を入れると、ぼろぼろと崩れてくる(壊していいのかって話もある)。

こんなに脆いといつか崩れるんじゃないかと思うのだが、もう何百年も使っているみたいだから問題ない気もするし。



とんがりコーン状の奇石と、街がマッチしている様子。奇石は住居にもなっている。

ぶどうの村

基本的には観光中心の村だが、奇岩のないところには、ぶどう畑が広がっている。

このカッパドキアではワインが名産らしく、奇岩をモチーフにしたデザインのラベルが貼られたワインが900円ぐらいで売っている。

味はまあまあ。

ぶどうを干してるところもあった。この時期には雨は一切降らない。これはワインとはまた違う酒を作るらしい。

この他にはスイカ、かぼちゃ、ポテトなどが取れるらしい。

一見乾燥した大地なのだが、地下水が豊富で、その水を利用した農業も行われているという話だ。



一面のブドウ畑から収穫したブドウを天日干にしてワインとは違う酒を造っているようだ。

地下都市

その豊富な地下水があったこそ、可能になった【地下都市】なるものがこのカッパドキアにある。ローマ帝国やイスラム教徒の迫害から身を守る為に、初期のキリスト教徒達によって作られたものだという。

作られた地下都市はかなりたくさんあるらしいが、観光客が入れるものは2つ。その1つデリンクルという場所に行く1日ツアーに参加してみた。

地下8階、深さ55メートル。

井戸あり、居住区あり、食堂あり、ワイナリーあり、教会あり。数ヶ月住めるだけの貯蔵庫あり。もともとはヒッタイトと呼ばれる時代(BC21~12世紀)から地下都市の地下一階部分はあったそうだが、それを横にも下にも拡張したのはローマ帝国時代、迫害から身を守る初期キリスト教徒

だそうだ。

地下 55 メートルから先は地下水が出て来てしまうので、そこまで到達すると、地下都市は横へ横へ広がっていったそうだ。

敵の侵入から守るように、通路を遮断する大きな石の扉がある。また 52 個もの通気孔から空気が取り込めるようになっていて酸欠を防いでる。通気孔は井戸も兼ねているが、敵から毒を盛られることを考慮し、どの階からもフレッシュな水が汲めるようになっている。

元々外敵はイスタンブール陥落が目的で、この都市には時々やってくる程度だったらしい。その時だけ、長くても数ヶ月間だけ住んでいたそうだ。

ただワイナリーや教会は外敵が攻めてこない時でも利用したらしい。

ワイナリーはとても良く出来ている。地上から穴が掘ってあり、地下でまず受ける。その部分は容器状に掘られていて、さらにこれを足で潰して出てくる液体は、さらに低い階に流れるようにブドウジュースの通路も掘られている。そしてろ過した後、カメで受け、短くて半年、長くて 2 年でワインを作っていたらしい。

地下は通年温度が一定でブドウの発酵に適しているそうだ。

足で潰す役目は、選抜されたきれいな若い女性限定だったとの事。いつの時代も同じだな。



地下都市の深いところにある教会。平和なときも、この教会を使っていたらしい。

スターウォーズ

次にツアー向が向かったのが、“スターウォーズの撮影現場”とロンプラに書いてある場所。ただガイドが言うには実は嘘という。

ガイドは皆、そういった方が、客に喜ばれるからそう言っているが、実は撮影現場はすべてチュニジアなんだそうだ。ここと似たような場所がチュニジアにもあるらしい。世界は広い。ここの奇妙な岩の形も面白い。そしてさらにその岩を掘って住居にしていたというのが圧巻である。

住居の外側には 10 センチ程度の小さな窓というか、穴が掘ってある。これはハトが住めるようにしてあるのだ。この地方の人たちは、ハトの糞を集めて肥料にしていたそうだ。

因みに、何故肥料なのかを解説したい。鳥の糞にはリン(P)が多く含まれているのである。植物の三要素、NPK の P である。だからブドウがよく育ち、ワインが美味しいのかも(by 化学者原中)。



スターウォーズの撮影場所と噂されている場所の洞窟跡(実は撮影はチュニジアだからここじゃない)。小窓はハトの住処。

カッパドキアの温泉

カッパドキア周辺には2つ温泉があると聞いていた。ところがどちらもギョレメからはかなり遠いことが判明。一人でタクシーを使うとかなり高いことからほとんど諦めていた。

しかし今日のカッパドキア1日ツアーには、日本人数名も参加していて、誘ってみると乗ってくれた。

カッパドキア見学終了後、ツアー会社に特別温泉ツアーを要請。ところがかなり高いことを言う。一人35Mリラ(2625円)だと。さらに温泉の入場料が10Mリラ(750円)だとぬかす。これは嘘だと感じたので、入場料は現地で直接払うことにし、交通費だけ取り出して交渉。交通費は一人10Mリラ((750円))まで下げた。後は如何に温泉の入場料を直接交渉するかだ。

ギョレメから温泉まで20キロと聞いていたが、実際には27キロくらいあったかな。

車で飛ばして25分は掛かっている。そして着いたのは病院みたいな温泉。

外風呂は完全なプールだが、気温は低いし、お湯も冷たい。星がきれいな夜なのでとても残念だが、内風呂だけに入ること。

内風呂は8×5メートルの浴槽。深さ1.4メートル。トルコのお風呂はどこも深い。

流れてくるお湯は42度程度だが、浴槽は39度くらい。無味だが若干硫黄臭。

温泉には8人くらいのトルコ人が入っていた。

奴等の騒ぎようたらない。肩車をしたり、水中で抱き合ったり、飛び込みしたり。まるで子供のプールである。ある意味ホモ集団である。

こちらの参加者には女性(一人旅の人妻)がいたのだが、そして彼女は若くてビキニの水着なのだが、あまり興味を示していない。そのトルコ人達よ、女性だぞ、若くてきれいなんだぞ、しかも日本人だぞ、何で興味を示さないんだ、俺だけ見てたら目立つじゃないか。もしかして君達って“ホの字?”。

でもそのうちトルコ人とも仲良くなって、浴槽の中で、『俺の肩に乗れ』と言う。やっぱりホモか、という危惧が無いでもないが、何だか面白い雰囲気になってきたので乗ってあげた。何故だか、私の時だけ、重そうな振りをするとところが不思議だが可愛い。

彼らに聞くと、この温泉は4Mリラ(300円)だという。ところがツアー会社の人間は10M(750円)だといっていた。ぼったくり発覚。

1時間温泉を満喫し、金を払う段階。温泉のスタッフにも聞くと4Mリラだという。やっぱり。ところがツアーの人間がすかさずやって来て、何やらトルコ語で言い、10Mリラと言う。温泉のスタッフも慌てて、10Mリラと言い直す。

ぼったくり共謀の瞬間。温泉の人間に知恵を付けやがった。もうこうなるとこちらの負け。帰りの車が人質に取られているだけに弱い。結局しぶしぶ10Mリラ払うことに。“ニューギョレメツアー”の嘘吐きめ。このツアー会社の男は、温泉のおじさんに、『電話で言ったら、10Mと言えって』という雰囲気の本気で怒っていた。

腹が立つが、まあ仕方がない。帰りの車でビールを飲みながらまったりする。この瞬間がたまらない。

しっぺ返し

温泉上がりのビールを飲んでまったりした頃、ギョレメに戻ってきた。

ところが次の瞬間、凍り付く。

何とギョレメのバスターミナルに並んでいたバス会社すべて業務を終了していた。

温泉ツアーに出る前に、『午前零時のバスに乗る時にカード払いね、いいよね、いいよね』と確認して予約だけしたのだが、これじゃあカード払いでいいのか出来やしない。いや、そういう問題じゃなくて、バスが来るのか来ないのかさえわからない。

次の日にはアンカラに戻り、ビザ取得の為、パキスタン大使館へ行く必要があった。でないとならに3日間もアンカラに滞在する事になってしまう。アンカラは何もない事で有名だ。

現在夜の11時50分。バスは来ない。そんな時、

『私の部屋にはベッドがもう1つあるわよ、ペンション』

と、一緒に温泉に行った人妻の愛の告白が。

若くて綺麗だからといって、ソリヤーさすがにまずいだろう。

『それで何号室ですか』

と一応丁寧に相手を傷つけない様に答える私。紳士である。

『6号室よ、バスが来なかったらいらっしゃれば』

人妻ってのは海外では独身である、しかしソリヤーさすがにまずいだろう。

『一応、3台ほどヒッチして、駄目ならお願いするかもしれませんが』と一応断る私。紳士である。

もうほとんど心は決まっているが、その時である、

『おれは9号室だよ』

何故か、誘ってもいないのに温泉に付いてきたフランス人の男。なんと自分の部屋のベッドも空いているというではないか。しかも彼女の愛の告白は日本語だったのに、完璧に事情を理解していやがる。

『おおっ、3時間ほどヒッチして駄目なら頼むよ』と一応答える私。

まったく余計な言葉を掛けてくれる。

しかたなく本当にヒッチすることに。

ところが来る車はすべてこのギョレメの人たち。ギョレメから12キロ離れたネフシェアーという街が次のバスターミナルへ向かう車は一切ない。そもそも午前零時を過ぎたあたりから車がばったり。

もう40分ほどギョレメの路上に立ちつくす私。

やっと来た車に思いっきり手を振ると、この車は停まってくれた。

でもパトカーだった。

エエィ、この際何だってOKさ、とお願いすると、何とネフシェアーまで行ってくれるという。

気づいてみると、着ている物は迷彩服。軍のパトカーだった様だ。

一見、汚いアジア人テロリストを連行する様に見える。

でも無事にネフシェアーに着き、本来乗るはずだったアンカラ行きのバスに乗る。

イラクには行っていないみたいだけど、ガンバレトルコ軍。有り難うトルコ軍。

でも来なかったら来なくてもよかったぞー。

つづく